

令和4年度 南信州民俗芸能推進協議会 総会 会議録

日時：令和4年5月23日（月）13：30～15：00

場所：南信州広域連合事務センター206・207 会議室

出席者：別紙のとおり

## 1 協議事項

全ての議案について、原案どおり承認された。

## 2 意見交換

<岡田南信州文化財の会会長>

今日の話聞いていて、伊那谷の民俗芸能を学校関係に広めていく必要があると思った。黒田人形、霜月祭りなど行事のあるところは熱心なのだが、そういったものがないところはそこまで視野を広げ、伊那谷全体で盛り上げていったほうがいいと考えている。

<松上柳田國男記念伊那民俗学研究所事務局長>

先日飯田市長からお練りまつりについての話があった。参加者から新型コロナウイルス感染症陽性者が出てしまい大変だったが、7年に1度だけの祭りであるから実施したとの話であった。地域でも様々なことをやりたいと思うが、コロナがあるから踏み切れない。実施する方々のある程度の覚悟が必要である。検査などの対策を十分とって、覚悟を持ってやらなければなかなか進んでいかない気がしている。

<金田下條村長>

私はどのような形で民俗芸能を支援していくべきかという観点で話を聞かせていただいた。これから三遠南信自動車道やリニア中央新幹線などが開通したときに、飯田下伊那地域として文化をきちんと持っているというのが大切なのではないかと考えている。これまで築いてきた文化を継承しながら、意思や精神においてそれを根底として人と話せるかというのが非常に重要ではないか。今後若い人たちが、これまで様々な形で継承されてきた伝統文化、伝統芸能を学ぶことによって、文化が継承されていくのだろうと思っている。

下條村では、中学生が1年間かけて歌舞伎を練習しているが、村民全体にまではなかなか結びついていないという面もある。下條村では保育園の園児がカブキッズとして、白浪五人男を上演したのだが、親や、祖父母にまで波及して盛況であった。こういったところから継承意識を掘り起こしていく必要があると感じている。

今日の話の中で、パートナー企業制度として伝統芸能に携わっている方が休暇を取りやすくなるというのは重要だと思った。また、上村青年会議の話があったが、若い人たちがこういった形で参加していただけるというのは素晴らしい。村でも参考にさせていた

だき、村の皆が集まって共同で取り組める場としてこういう場ができると良いと感じた。

伝統芸能を本にして残すなどして、継承のための取り組みをしていただいている。それをどう活用していくか、一人一人がどう咀嚼していくかといったことに重点をおいてやってまいりたい。今日はこういった席に初めて出させていただいたが、いい勉強になった。

#### <小川アドバイザー>

この事業で平成 27 年度から、いろいろなことを積み上げてこられて、実績も作ってこられて、長野県モデル、南信州モデルというものができつつあると感じている。国内でも南信州の取り組みについては注目度が高い。一つ例を挙げさせていただくと、パートナー企業という制度を作られたが、これは非常に柔軟な発想で、よくこんなことをされたと思っている。宮崎県では神楽がとても盛んで、神楽のサポーター企業制度というのをやっている。南信州は登録制度であるのに対し、宮崎は認証制度なので実績が必要となる。お金でいうと高額の支援金が必要となるが、それを満たしてくれているところも出ている。宮崎県がサポーター制度を作るにあたり、南信州広域連合と南信州地域振興局の両方に視察に来られた。埼玉県からも問い合わせがあると聞いており、注目度が高い。全国各地で無形の文化をどうやって維持するかが課題となっているが、南信州はトップランナーである。最初から全て形を整えてというのはできるわけがなく、事業を行いながら一つ一つ改善したり、付け加えたりしてより充実したものを目指していくしか方法はない。

上村青年会議はいい活動をしている。神楽や獅子舞は国民的な文化だが地域により特色がある。私たちが考えなければならないことは、地域の活力がどうしたら維持できるかということ。少子高齢化の中で、人口構成も変わり、生活様式が変わり、どうやったら豊かな生活ができるのか、もっと大事なのは、子供たちが未来に向けてどんな夢が描けるのかということである。夢が描ける地域を作るのは、役所の役目というのでなく、日本に住む者として、皆が意識しなければならないことだと思う。その際に何が大事なのかというと、地域を地域たらしめているものは何だろうということ、地域個性という言葉は私使っている。長野県の魅力は、地域によって見え方が違うということにある。みんな一緒だったら一度訪れれば良いとなる。長野県の多様性、もっと個別に言えば南信州の個性が多くの人たちを惹き付けている。北信に行けば善光寺、中信に行けば松本城、佐久諏訪に行けば諏訪大社、木曾へ行けば街道沿いの古い建物といったように、外から訪れて印象付けられる事柄があるが、南信州は民俗芸能と祭り、隠れたところでは飯田の和菓子。地域個性をそれぞれのところで考えることで、繁栄し地域活力となる。祭り、芸能は一人ではできない、人と人を結びつけるものであり、持続させることが地域活力となる。

その時に重要となるのが継承のためのコスト負担をどうするか。コスト負担というのは資金だけでなく、人と資金。コスト負担のうちの人の面はパートナー企業制度、青年会議、あるいは地域おこし協力隊、移住促進などである。移住促進に関して大鹿村は典型的な例で、大鹿村で生まれ育ったわけではなく 20 年前に越してきたという方が御柱の中心と

なって活躍している。きっと大鹿村ではそういった方に対し様々なサポートをしてきたため、長く住んでおられるのだと思う。また、地域おこし協力隊とどういった連携をしていくかというのを課題に入れてほしい。そしてパートナー企業に関して。企業はCSRという社会的な責任を負っている。残念ながら日本社会は企業に社会的責任を求めるといふ土壌ができていない。外資系はそこがかなり進んでおり、様々なものを寄付したり、ボランティアしたりといった慈善事業を行っている。大阪に本社のあるアストラゼネカという製薬会社で、3,000人の社員が一斉に棚田の整備をし、棚田学会はそれに石井進記念棚田学会賞という賞を授与した。南信州でも表彰制度に加えて、賞を作ってもいいのではないか。

資金の面では、宮崎県の椎葉神楽保存会の話になるが、保存会会長がコロナ禍の中で神楽を実施はしたが、表立っては住民だけでやるということで宣伝しなかったせいもあり、客が多く来ず大赤字だということであった。宮崎の神楽は、行くと夕飯も夜食も出る。その代わり、県や市町村といった行政もパンフレットに寄付や玉串料のお願いを記載している。おおよそ3,000円もしくは焼酎2本なのだが、それは食べ物を出してくれるのだからマナーであるとの考え。観光と言ってもいいのだが、来てくれる人が玉串料など何らかの形でお金を払っている。持続のためのコスト負担として、観光もその一つであると考えなければならない。誰がコストを負担するのかというと、今までは当事者である地域住民に全て負担を任せていたが、人口減と社会情勢でそうもいなくなった。新しい時代の中で、どう資金獲得をしていくのか、どこまで公費をつぎ込んでいいのか。文化財保護法だけでなくほかの論理もそこに入れていく必要があるのではないか。

今言った地域個性ということと、コスト負担、人と資金をどうするかということは、まさにリニア時代の重大問題。リニア時代をどうするか考えるにあたって、真っ先に考えなければならない問題だと私は思っている。

それから、地域の人はどうやったら自分たちの文化を大事にするだろうか、郷土に愛着を持ち、自分たちの持っている文化へ誇りを持つことができるだろうかということも大事な問題である。子供のころから神楽を舞ったり、念仏踊りをやったり、笛を吹いたりするのは、ある意味では贅沢な技量、文化を身に付けているということで、外から見ると羨ましく思う。こういった文化を全国に発信していくことによって、担っている人たちが、自分たちの持っているものを再確認できる。そうすると、非常にモチベーションが上がる。

宮崎県では国庫補助を受けて、多い時では年に東京で2回、大阪で1回、神楽の公演を行っている。費用全てを県が持ってやっていたが、宮崎から神楽を一つ持っていくのに200~300万かかり県費では持続はできなかった。そこで宮崎の神楽サポーター企業。サポーター企業というのは100万円以上寄付金を出したらサポーター企業になれる。県の職員は熱心に東京なども回ったが、大企業は、出すとなると宮崎だけというわけにはいかないといこともあり、なかなかうんと言ってくれない。むしろ中小企業、福岡あたりのIT企業などはポンと出してくれる。探せば寄付金を出してくれるところはあり、それで東京

公演ができています。民間の劇場は来年の予約となると予約金が必要となるが、公費ではそれが支出できない。しかし、国立の機関は予約金を取らず、使用料も民間の劇場と比較してかなり安い。だから東京の国立能楽堂、大阪の国立文楽劇場を借りて公演している。

民俗芸能ナビやファンクラブの配信、これらは南信州モデルであり、他でやっているところはない。このような充実したものを作っているところはないので広がってほしいと思っているのだが、もう一つ、民間から寄付を求めて魅力発信基金ができないか。金額の目標としては、3,000万円程ではどうだろうか。ファンドを作り、南信州の芸能のうち、東京の大きい舞台で公演が可能な団体に行っていただいて、大勢の人に見ていただくことができるかと思う。

まとめると、地域個性としての民俗芸能や祭りというものをどうやって持続していくか、そのことが地域活力とダイレクトにつながってくる。もう一つはやはり、それを担っている人たちの喜びや誇り、そういったものを満足して次世代に文化をつないでいくためには、登場する舞台を自分の村以外に作っていく。そうすることで新たな認識が生まれていくので実現できたらと思っている。

#### <櫻井アドバイザー>

今コロナが非常に問題になっている。昨年も発表させていただいたが、コロナ禍でそれぞれの保存会がどういった対応を取っているか、できるだけ見歩こうとしている。飯田お練りまつりも諏訪の上社下社の里曳きも見に行ったのだが、それを見て感じたことはお祭りの大切さ、いかに民俗芸能やお祭りが、地域の人たちの活力となるか。それを本当に実感した。私は民俗芸能には文化財的な価値もあるが、地域の歴史を凝縮したものだと思っている。民俗芸能を見ることによって地域が見えてくる。人々が世代を超えて接するから地域の絆が深まる。本当に大事なものだと思っている。

今回のコロナ禍がきっかけとなり、社会的にもいろいろなことが大きく変化するなど、歴史的な、非常に大きな変換点にあると思っているが、その中で祭りも変わっていかざるを得ない。コロナ禍でどういった対応を取ったかというのは当然であるが、その前と後でどう変わっていくか。前のことを知っている傳承者が減っている中で記録というものが非常に重要だと思っている。南信州でも資産化事業というのを進めてきて、新野の雪祭りと清内路の手作り花火を記録した。そういった取り組みを他の団体でも進めていく必要があると思っている。そのためには、長野県の元気づくり支援金もそうだが、他にも様々な補助制度があるのでそういったものも活用していく必要がある。文化庁でも地域の伝統行事等のための傳承事業というのが行われており、総額予算が65億円。他の県ではかなり申請を出しているが、長野県からはあまり出しておらず、飯田下伊那はほとんど出していない。繼承事業の中でこういった補助制度があるということ働きかけながら、有効に活用していくことも必要でないかと思っている。

風流踊がユネスコ無形文化遺産登録になりそうということだが、それに続いて神楽を

登録に向けていきたいという動きがある。ユネスコや国県の文化財指定、選択であればそれを指定に格上げしていくということもやっていかなければならない。清内路煙火等資産化事業の報告会もそれを狙っている面もあり、清内路の花火も国指定に上げていく良いきっかけになればと思う。他の芸能についても、この事業の中でそういった取り組みができればいいと思う。

最後に小川先生の話とも重なるが、特に今回大鹿村の歌舞伎と御柱祭などを見に行つて、Iターンの方が多くいらっしゃり、ご活躍されているのを目のあたりにして、民俗芸能があることによってその方々が地域と結びついているのではと強く思った。そういった意味で、将来を見通す中で民俗芸能をより大事にしていければいいと思っている。

#### <丹羽長野県南信州地域振興局長>

県では来年からの5カ年計画を策定しており、その中で南信州の地域編というのをやる。今も伝統芸能は入っているが、次も伝統芸能を扱わなければならないと思っている。ただ言葉として載せるのではなく、次の5年何をやるかということを考えるにあたり、今アドバイスいただいた部分は非常に意味を持つものだと思っている。また研究させていただいて、しっかり考えてまいりたいと思う。また、コスト負担ということで、人とお金をどうするかということをしっかりやらなければならないと考えている。南信州と上伊那地域の22市町村でいろいろな取り組みを進めており、郷土愛プロジェクトとして子供たちに企業の良さを知ってもらうというプロジェクトがある。地域の良さを知ってもらうという取り組みも南信州と上伊那地域と一緒にやっていこうという話がある。先程お話しいただいた文化の部分を子供たちに知ってもらう、南信州と上伊那地域で知り合う、学びあうということが非常に大切だという視点をいただいたので、そのことも検討させていただきたい。引き続きアドバイスをよろしく願いしたい。

以上